

兄戦死の地に 66年経て訪問

2011年05月23日



「兄の最期の地を見たい」と慰霊祭に参列した(左から)井口拓夫さん、山本アキさん、赤星和さん＝多気町車川

■45年5月22日 多気に旧陸軍機墜落

終戦直前の1945年5月、旧陸軍の爆撃機が墜落し、搭乗の8人全員が死亡した多気町車川の山中に立つ鎮魂碑で、命日の22日、地元主催の慰霊祭があった。搭乗員のうち、新潟県出身の「井口見習士官」は昨年夏、井口信介さん(当時22)であることが判明。「兄の最期の地を見たい」と、新潟県や東京都から信介さんの弟妹3人が初めて訪れ、感慨ひとしおだった。

■弟妹、地元慰霊活動が縁で判明

重爆撃機「飛龍(ひりゅう)」は、浜松教導飛行師団(静岡県)で編成された。当時、米軍の占領下にあった硫黄島の基地爆撃に成功し、引き返す途中、未明に車川の山中に墜落した。標高500メートル近くの墜落現場には50年後に林道が開通し、遺族が旧勢和村と車川地区の助力を受けて碑を建立。地元では毎年、慰霊祭をしている。

この日訪れたのは、信介さんの弟の新潟県魚沼市、井口拓夫さん(80)と妹の東京都品川区、山本アキさん(83)、同武蔵村山市、赤星和さん(74)ら7人。

3人は「出征する時を思い出しました。感無量です」「長い間、人々の記憶から遠ざかっているのに、毎年、お参りされていることを知り、ありがたい」などと話した。焼香のあと、拓夫さんは「不思議な縁で弟妹が集まったのは『長年のお礼を申し上げてくれ』と、兄が導いてくれたから」と、遺族を代表してお礼を述べた。

鎮魂碑が建立された8年後の2003年には、町議の寺村龍介さん(70)ら地元住民らが、篤志家からの寄付で、墜落現場から6キロ離れた県道沿いに「航空戦士散華之地」の碑を建てた。碑には21～32歳の搭乗員のフルネームと官位、出身地、年齢が刻まれたが、「井口見習士官」は年齢「不明」とされ、下の名前も分からなかった。

自衛隊OBでつくる隊友会の1人が、碑の周りの清掃活動など寺村さんらの活動をホームページで紹介したところ、昨年夏、井口さんの遺族が知り、寺村さんに連絡してわかった。

寺村さんは慰霊祭の後、「ほっとした。やっと一区切り出来た」と振り返った。碑の「井口見習士官」の後には「信介」「二十二才」と新しく刻まれ、それを見た拓夫さんは「ジーンとききました」と感無量の様子だった。(森山敏男)